

福祉教育でのICT活用 ～つながりと広がり求めて～

県立松戸向陽高等学校

1 ICT活用の目的

県内で唯一、介護福祉士の国家資格が取得できる専門学科として、コロナ禍の中にあっても資格取得のための実習（代替実習）を継続していくことが必須だった。そのためにはオンライン双方向通信を使った実習を実現させることが急務であり、可能な限りの協力を実習施設に依頼した。

また、施設での実習以外にも講師による校内での特別授業に置き換えることが考えられ、そうした際の教室へのオンラインでの画像配信などを推進する必要が生じていた。

結果として、こうしたICTの活用環境を整え、双方向通信による実習を軌道に乗せた令和3年度末には卒業生37名全員が、本校の開校から初めてとなる「**介護福祉士国家資格100%合格**」という快挙も生み出された。

コロナ禍によって学びの工夫として取組まれたICT活用推進は、結果的に学習指導要領に記された、「主体的学び」や「協働的学び」、そして「個別最適化した学び」を、専門学科として大きく推進させるツールになったと言える。



令和3年度卒業生全員合格！

2 期待される効果

(1) 実習を止めない働き

実習の継続を図るなかでは、ICT活用による双方向通信をその中心に据えた。

令和4年度においては校外の各施設で実習を進めることができているが、現段階でも



双方向での実習風景

感染症拡大防止の問題は解消されていない。特に高齢者には生命の安全と安心に直結する問題となることもあるため、後継人材育成に向けた受け入れ施設の協力なくしては前に進めない。

実習の開始時点では許可が下りていても、途中で利用者や生徒の体調に異変があれば予定変更をしなければならない場合もある。そうした際の緊急避難的措置としても、一度構築されているリモート実習ネットワークの活用は実習を止めない有効なツールとして期待できる。

また、本校にとって幸いなことに、施設に赴いての実習が閉ざされた時期に重ねて、国の「スマート専門高校」の実現事業によるデジタル演習室が校内に整備された。このことは代替研修の工夫を進める上でも大いに役立った。



上 2 枚はデジタル演習室

(2) 特別授業での活用

リモートによる施設との双方向オンライン実習で代替のすべてを賄うことは不可能なため、様々な講師や学びを求めて多くの特別授業を展開した。介護福祉士の資格取得を目指す生徒にとって専門知識の吸収と実践的な学びは不可欠である。施設職員の方に遠隔で講義や解説をお願いしたり、介護関連企業により、高齢者に適した住環境、最新機器を使った介護食・栄養指導といった学習なども実践できた。こうした学びから、ICT活用が「主体的学び」や「協働的学び」、さらには「個別最適化した学び」に結びつくことに改めて気づかされた。手に入れた数々の企業や施設とのつながりは、校外実習が回復された現在でも有効な学習手段として継続をしている。



上 2 枚はリモートでの遠隔講義



上の画像 2 枚はVRゴーグルを活用した「認知症疑似体験」「看取りの疑似体験」

(3) 福祉教育でのICT活用授業

下の表は令和3年度以降の福祉教育における、ICTを活用した施設・企業・教育行政等との学習の連携である。

年度	月	対象	授業	内容
令和3年度	6	3年	介護実習	市川市の施設とのリモートによる実習
	7	2年	介護実習	東大阪市の施設でのリモート講演参加
	8	1年	介護実習	千葉・習志野・松戸、3市のホームのリモート施設見学と認知症理解
	10	3年 2年	特別講座	介護のしごと等魅力発信事業、シルバーウッド社によるVR「認知症・看取り」体験実習
	12	1年	特別講座	三菱電機ライフサービス社（講師）により、鎌倉市と伊丹市のサービス付高齢者住宅リモート施設見学
	1	1年	社会福祉基礎	千葉県介護の未来案内人事業 教室にリモート配信
	2	1年	介護総合演習	大分南高校福祉科とのリモート交流会
	3	1年	社会福祉基礎	松戸市内町内自治会の子ども食堂運営等にボランティア参加し、インタビュー動画を授業に活用
令和4年度	5	3年	介護福祉基礎	(株)リハビリコンパス社の定期巡回随時対応型訪問介護看護のプレゼンルームでの授業
	6	1年	社会福祉基礎	松戸市教育委SSWインタビュー動画を授業に活用
	7	2年	介護実習	SOMPO ケア社のプレゼンルームでの授業
	10	全	特別講座	国立国際医療研究センター・(株)oneによるYouTubeやオンラインの応答を活用した「薬剤耐性」の授業

*令和4年度10月以降は前年度に準じて行う予定です

(4) 生徒の反応

リモートで双方向実習を行う際など、施設職員の指導を受けながら、「利用者様に同じ問いかけを繰り返さないよう気をつけた」「コロナ禍で実習が途絶えたので、リモートでも直接のやり取りができて緊張した」といった声が聞かれた。

VR体験は他県で先進的に取組まれていた情報を基にしたもので、取組んでみるとそのリアリティーに圧倒されていた。認知症の疑似体験では「自分が目指している介助という行為が、認知症の方には時に不安や恐怖そのものになる。理解が深まり、より相手に寄り添い気持ちを汲み取ることの大切さを知った」などの感想があった。

看取り疑似体験では死へのプロセスに涙する生徒もいて、「人間の尊厳が実感できた」「看護師とは違った死の看取り方が介護福祉士にはある」といった言葉が生徒の口に出た。

(5) 関係施設や企業との連携の成果

通常学習や近隣の固定した施設実習とは違った視野の広がりを与えてくれたことは言うまでもなく、ICT活用を通して日本中の様々な施設や関連企業と空間的な広がりをもって学習を行ったことは大きな成果となった。

また、作る側、提供する側としての企業によって計算された様々な物品の意図、何気なく触れていた介護用食品や用品の持つ特性や意味といった「背景」を知ることができたことは生徒にとって大きな刺激になった。「介護食品への見方が変わった」という生徒もあり、今後、自らがこうした物品や環境を介護職員として活用していく際の、深い理解につながっていることが期待される。

2 ICT活用の拡大

(1) 他県福祉系高校とのリモート交流

令和2年度から3年度にかけて、国立教育政策研究所から「教育課程研究指定事業（福祉）」の指定を受け、研究に取り組んだ。この研究事業に同時期に参加していた他県の高校と学習交流が深まり、同じ学科を学ぶ生徒同士として研究発表を終えた現在も意見交換会などの交流を双方向通信で実現している。本年度も12月実施する予定である。



リモート交流の画像

他県の高校は先進的な事例も多く、生徒は「たくさんの刺激を受けている」「同じ目標があるので話していて楽しい」といった感想を伝えてくれた。交流は今後も生徒の委員会が企画して継続していく。

(2) ひまわりチャンネルの開設

コロナ禍の深刻な時期に施設利用者は家族の面会さえできず、施設が非常に閉鎖的な環境になった。このとき、本来は実習のためにつないだリモート回線を活用して、施設利用者を励まし、日頃の恩返しをしようという活動が福祉教養科交流委員会・活動委員会を中心に開始された。これが「ひまわりチャンネル」である。

内容は軽微な体操、クイズ、歌などで、右のチラシには「パタカラ体操・シャボン玉（歌）・ふるさと（歌と手拍子）」などが見える。その右のQRコードを読み取ると接続ができるようになっている。



昼休み等を活用してインターネット回線を通じ、施設の食堂・居住空間などに設置してあるテレビ画面からテレビ番組のように利用者に語りかけると、知っている歌をともに口ずさみ、体を動かす利用者も少なくなく、今では利用者から、「高校生との昼休みを楽しみにしている」という嬉しい声を聞く。



左は施設での配信風景・右は校内での送信風景

(3) コンテストや発表大会のリモート提出

生徒の学習を客観的に総括し、新しい課題や知見を吸収するためにもコンテスト等の参加は有効である。また、講評や顕彰を得ることで生徒の意欲が高まる効果もある。また、コンテスト後の生徒交流会も、「他校生とつながる機会になった」と好評であった。

コロナ禍の初期には、実習が閉じられるのとあわせて各種の大会が閉じられたが、学習活動を活性化させるためにも、リモートにより大会運営が試みられ、生徒もよくこれに応えた。結果として以下のような成果を挙げられたことは、生徒の喜びとなり、本校にとってもありがたいことだった。

高校生介護技術コンテスト千葉県予選会・表彰風景



- ・令和3年度関東地区高校生介護技術コンテスト千葉県予選会「最優秀」(県内第1位)
- ・令和3年度関東地区高校生介護技術コンテスト「最優秀」(関東大会第1位)
- ・令和3年度高校生体験発表大会(オンライン発表型)「学長賞」(第1位)
- ・令和4年度関東地区生徒体験発表「最優秀」(関東大会第1位)
- ・令和4年度関東地区高校生介護技術コンテスト千葉県予選会「最優秀」(県内第1位)
- ・令和4年度関東地区高校生介護技術コンテスト「優良」

3 県や市行政等との協働とICT活用

(1) 松戸市福祉長寿部介護保険課

松戸市とは「松戸市協働事業『まつどの介護』」で協働している。松戸市における介護制度や施設を動画化してわかりやすく市民に伝えるとした事業内容で、本年度、福祉教養科の生徒が出演して案内役を務めた動画が、現在2編(今後も制作予定)市福祉長寿部介護保険課公式YouTubeチャンネルにアップロードして配信されている。



② 県健康福祉部健康福祉指導課

県健康福祉部とは「千葉県介護職の理解促進・魅力発信事業」の一環として映像制作で協働した。内容は、この事業を委託されたNHKグローバルメディアサービスが計画した「真の介護を伝えたい」と題する介護フォーラムへのパネリストとしての生徒参加。

また、フォーラムの前段階から本校での撮影と取材を行うことで、NHK Eテレの番



組「TVシンポジウム『明るい介護～次世代の提言～』」として放映するというものだった。最終的には、映像教材の制作までが予定されている。

校内での撮影と取材は本年7月半ばから始まり、9月10日に千葉市民会館大ホールで介護フォーラム「真の介護を伝えたい」が開催された。さらに、10月15日NHKEテレ「明るい介護～次世代の提言～」が1時間番組として放映され、大きく反響を呼んだ。



TVシンポジウム “明るい介護”次世代の提言



2022年10月15日 土
午後2時～午後2時59分 NHK Eテレ

※NHKプラスならパソコンやスマホでも放送後1週間ご視聴いただけます。

加速する日本の高齢化。介護の担い手をどう集めるのかが喫緊の課題となっています。番組では福祉を学ぶ千葉県の高中生たちが、介護体験者のハリー杉山さん、“笑顔あふれるケア”を試みる介護職の皆さんとこれからの希望ある介護についてとことん語り合います。

【番組の内容】

◆定年介護したハリー杉山さんが伝えた“介護のプロ”～語り手 杉山 麗子 “孤-35”
◆介護現場が変えるケアの現場 ◆ベッドの構造やアシストで負担を軽減
◆センサーで動作を感知する“ロボット”介護 ◆検査で実践“地べたからの介護”が実現する未来

出演者：ハリー 杉山さん(タレント)

・田川 幸徳さん(自治体) 千葉県主任介護支援専門員ネットワーク 理事長

・石井 栄子さん(利根福祉在宅介護お世話会) 代表取締役社長

・望月 玲子さん(千葉県立松戸南高等学校) 福祉教育科 主任

・介護を学ぶ高校生の皆さん(千葉県立松戸南高等学校、千葉県立市原高校、千葉県立佐倉西高校)

コーディネーター：高尾 楓夫さん(アナウンサー) ナレーター：加藤 有生子さん

※この番組は半年前月に開催した「介護フォーラム」集めた話を基に制作されました。

制作 NHKグローバルメディアサービス

撮影と放送での一コマ

今回のフォーラムやテレビ出演時の取材者や司会に対する生徒の回答は、日常的に学校で見せている表情を超えて、自分の内面や信念、意思を率直に伝えるような言葉が多く、例えば、福祉教育を目指した理由として「将来は助産師を目指しており、人間の誕生と向き合う前に、人間の老いや終末を学びたかったので福祉の学科を志した」「子供の頃に接した老人たちから親切にされ、恩返ししたくてこの道を選んだ」といった回答は本校の3年生のものであり、こうした言葉の数々が見ている方々の心を動かし、たくさんの共感と賛辞の言葉をいただいた。

③県教育振興部学習指導課

県教育振興部学習指導課とは「ちばで発見！職業観育成コンテンツ～スペシャルハイスクール編～」の制作事業で協働している。内容は県内高等学校の専門学科に関する情報をインターネット上で提供し、中学生や高校生に千葉県内の産業の魅力を知らせるとともに、産業や職種についての理解を促進し職業意識を形成していくようなコンテンツを作成することにある。委託を受けた千葉テレビ制作スタッフにより、10月、福祉教

養科の授業風景と施設における実習風景が撮影された。本年度末の2月、県のHPに公開される予定となっている。

④国立研究開発法人国立国際医療研究センター

国立国際医療研究センターと事業の委託業者(株)oneから、薬剤耐性（AMR）対策学校教育施策による授業を依頼された。10月、福祉教養科の全クラスを2つの教室に分け、「知ろうまろう抗菌薬～クスリが効かないバイ菌の話～」をYouTubeで視聴、質問をオンラインで受け付けるなどのICT活用で実施した。「動画が親しみやすく、理解できた」という感想があった。今回、この授業は試行的に行われたものだが、今後全国で展開されていく予定である。

⑤小・中学校との学習交流

本年の10月、県事業、市川市立塩浜学園（義務教育学校）で開かれた「専門学科を体験しよう（福祉）」特別授業に、本校の福祉教養科教員が講師として赴いた。「地域共生社会の実現」と題し、視覚・聴覚・肢体等の障がい理解と共生を9年生の生徒とともに考えた。参加した生徒たちは各人のパソコンを活用した調べ学習の後に、グループとして意見交換し、理解を深めていた。授業の途中や終盤で、「障がいがあってもコミュニケーションをとって、皆で暮らせる社会をつくるのが大事と思った」「社会の弱い人に支援をすることが必要で、そのためにはコミュニケーションと協力が大切」といった感想が語られていた。

今後の計画としては、1月に松戸市内の小学校に教員と生徒が福祉教育の出前授業を行う予定である。その際にも、ICTを活用し分かりやすい講座を工夫していく。



「専門学科を体験しよう」

3 今後の方向と期待

福祉の学びは実学であり、校内での基礎的な知識・技能の習得に加えて実社会に触れる学習活動を体験することで、生徒が成長していくと言える。

福祉教育にとってICTの活用が社会に開かれた学びの窓口となっていることへの期待感は強く、本県に1校しかない専門学科としては「学びの輪を広げ、最新の知見・技術に触れ、つながる」有効なツールとなっている。

今後は県立高校改革推進プランに則り、福祉教育の「コンソーシアム」が令和6年度の設置を目指して立ち上げられていく。本校はその拠点校であり、コンソーシアム設置後には事務局校として「福祉の輪」の運営主体としての役割を担う。新しい学びのネットワークの構築には、ICTの活用が欠かせない存在になるだろう。そんな思いも込めながら、今後も積極的なICT活用の中で、関係する高等教育機関や施設、また関連企業との学びの在り方を探し、つながり、広げていくことを目指している。



他校生徒とのネット交流

4 資料（報道）

・オンライン実習

毎日新聞（オンライン版） 令和3年7月9日

目 松戸向陽高：高齢者とオンライン会話 介護人材を養成、松戸向陽高 施設が協力、リモート実習 /千葉

2021/07/09 毎日新聞 地方版 23ページ 1104文字 [+](#) その他の書誌情報を表示

介護人材を養成する県立松戸向陽高校（松戸市）が、コロナ禍でも生徒に実習で知識や技能を身につけてもらおうと、今年度から介護施設とオンラインでつないだ「リモート実習」を始めた。感染リスクなどから昨年以降実習が困難だった施設での実習が、身体接触などを伴わないリモートによって可能になった。福祉系の教育機関でのリモート実習は珍しいといい、同様の課題を抱える他校の参考になりそうだ。

「仕事の後のお酒は最高でしたか?」「若いころは食欲が旺盛でしたか?」――。6月16日にあった福祉教養科3年生のリモート実習。教室の黒板に映し出された高齢男性に対し、女子生徒2人が次々に質問した。

男性は市川市内の特別養護老人ホーム「サンライズ市川」の80代の入居者。自室にカメラを据え、高校生と対面した。男性は認知症患者だ。2人は約30分間、男性が旧築地市場（東京都中央区）で働いていた話などをした後、介助の男性の手を借り、ベッドに横たわる様子を見守った。他の生徒たちもメモを取りながら注視した。

高齢者とのコミュニケーションは、その人に合った「介護計画」を立てるための大切な情報収集の機会となる。2人は実習後「自然な会話にするため、相づちを繰り返さないように心がけた。校外実習は2年ぶりだったので、慣れずに緊張した」と話し、表情を和ませた。

福祉教養科（定員40人）は県内唯一の福祉専門学科だ。卒業前に介護福祉士の国家試験を受験し、資格を取得。2020年度の合格率は全国平均の71%に対して97・1%に上る。施設で行う介護実習は3年間で455時間（60日）に及び、介護福祉士の受験資格を得るためにはその5分の4以上の出席が必要となる。しかし、昨年はコロナの影響で施設実習ができなかった。

幸い、国が代替措置を認めたため、同校は実物大の人形を使って着替えやおむつ交換、入浴の訓練を続けたが、高齢者と相対する機会は失われた。そこで、関係施設にリモート実習への協力を呼びかけたところ、この施設が引き受けてくれたという。施設の担当者は「生徒の学びの機会がコロナ禍で減ってほしくなかった」と打ち明ける。担当の鈴木恭太教諭は「実施には、施設の利用者やその家族、同じフロアの入居者らの許可を得なければならぬ」と話し、負担が増す施設側の理解が必要との認識を示す。

荒井俊郎校長は「画面を通して、高齢者と多数の生徒がリアルタイムで会話ができるのは効率的。本校の生徒が先生役になって、小中学生に行う福祉の授業をリモートで実施することもでき、人材確保にもつながる」と期待している。【橋本利昭】

■写真説明 施設の高齢者と画面を通して行われたリモート実習



施設の高齢者と画面を通して行われたリモート実習